

あとがき

『歴史家の城歩き』の東北バージョンを考えている、と齋藤さんからうかがったのは、二〇二〇年六月であった。私も同書のファンだったし、何しろ東北を城で盛り上げたという気持ちが強かったため、是非お願いしますとお伝えした。一方で、頭の回転が鈍く討論や対談が苦手で、しかもまだ東北に来たばかりで何も知らない私に、あのような対談をあの中井さん・齋藤さんとするなんて到底無理という不安にも襲われた。幸い、まだ先の話のようだったので、内心ホッとしてゆつくり準備をするつもりでいた。すぐさま、おおよその内容構成を議論したものの、その後は大きく進むことなく、一年以上が経過した。ちょうどそのころ、筆者は勤務する東北学院大学アジア流域文化研究所の公開講演の講師選定することになった。倭城や瓦の話をしていただこうと思い、中井さんにオファーしたところ、幸いにもご快諾いただいた。そして、二〇二二年一

月に中井さんをお呼びすることになったのだが、そのついでに齋藤さん・濱さんにも来ていただき、東北の城をいくつか見てみませんかとお誘いしたのである。

私としては、将来出す本のための準備のような感覚であったが、甘かった。そこから一挙に座談会、前川本城などの現地踏査、執筆者の方々への原稿依頼の連絡、そして自分の原稿と、話がとんとん拍子に進んだのである。まさに電光石火、ヘトヘトになりながらも、皆様のご協力のおかげで何とか刊行までこぎつけることができた。筆者が仙台に来て一〇周年という節目に、このような本を刊行できたことはとても嬉しい。

対談という形式で本を出すのはもちろん初めてだが、やはりできあがったものを読むと面白い。私は時折顔を覗かせる程度だが、城郭研究を牽引してこられたお二人から繰り出されるさまざまな視点・論点は、非常に勉強になった。

また、事例報告をご執筆いただいた皆様を始めとした東北各地の方々の、まさに長年にわたる地道な調査研究あつてこそ、このような本が出せるのだと改めて実感した。本書では、そうした先学の研究すべてを取り上げることとは到底できなかったし、陸奥国が中心で出羽国や蝦夷地・越後国方面との関係についてはあまり取り上げられなかった。また、見落としや評価の違いなどもあることだろう。私としても、今後も先学に学びながら、さまざまな形で「東北の城とは何か」を考え続けたいと思う。

部屋のなかでの座談会だけでなく、現地踏査も天候に恵まれ、とても楽しかった。私もそれなりに各地の城を見てきたつもりだが、それでも衝撃を受けた前川本城・上楯城・三沢城を中井さん・齋藤さん・濱さんにご覧いただき、現地で議論できたことも、素晴らしい経験となった。宮城県には、ほかにも御所館や姫松館、高館城など、まだまだ全国的には知られていない驚くべき城がたくさんある。ただ残念ながら、せっかく「城」が付く県なのに、城に興味を持つ人が少なく、あまり盛り上がっていないので、本書をきっかけに全国から注目されるようになれば嬉しい。

読者の皆さん、ぜひ東北各県の城を見に来て下さい。美味しい食べ物、素晴らしい温泉もたくさんありますよ。

本書に掲載された縄張図のうちのいくつかは、中川喜弘氏にご提供いただいた。実によくできた縄張図であることがわかるだろう。現在は東北大学の学部生であるが、氏は高校生の頃から縄張図を描いている人である。私は高校生の頃から齋藤さん経由で存じ上げていたが、東北大学に入学するということで、以来県内の城めぐりと縄張図作成を手伝っていた。その縄張構造の読解力は驚異的なものであり、むしろ私の方が勉強させていただいている。今回の現地踏査にも同行し、中井さん・齋藤さんと議論する姿には舌を巻いた。彼の今後の活躍にも期待したい。

最後に、執筆者選定から内容構成までご助言をいただいた飯村均氏と八重樫忠郎氏、大変お忙しいなか、突然メールや電話でお願いしたにもかかわらず原稿執筆をお引き受けくださった皆様、そして全般にわたりお世話になった濱さんにお礼を申し上げます。

令和六年三月日

竹井英文